

その 22

3 冊の『萬葉集物語』



『萬葉集物語』初版本の見返し

海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍 大皇乃 敵尔許曾死米 可敵里見波 勢自

「海行かば 水漬(みづ)く屍(かばね) 山行かば 草生(む)す屍 大君の 辺(へ)にこそ死なめ かへり見は せじ」

(海に行くのなら水びたしの屍、山に行くのなら草むした屍をさらしても、大君のお傍で死のう、後悔はない)

大伴家持(巻 18・4094)

御民吾 生有驗在 天地之 榮時尔 相樂念者

「御民(みたま)我 生ける驗(しるし)あり 天地(あめつち)の 榮ゆる時に あへらく思へば」

(天皇の民である私は生きてきた甲斐がございます。天地の榮える大御代に生れ合わせたことを思いますと)

海犬養宿祢(あまのいぬかいのすくね)岡麻呂(巻 6・996)

この 2 首の歌は、昭和 15 (1940) 年に刊行された『萬葉集物語』初版本の表紙の裏側、つまり、見返しに木版で印刷されたものである。最初の歌「海行かば」はよく知られた軍歌で、昭和 12 (1937) 年、当時の大日本帝国政府が国民精神総動員強調週間のテーマ曲として、作曲家信時潔が作曲し、作詞は大伴家持とされている。もう 1 つの歌「御民吾」は、聖武天皇の詔にちよって、官人の海犬養宿祢岡麻呂が、天皇を讃美して詠んだ歌である。ともに天皇のためなら「死も厭わず」という軍歌と天皇の盛徳を詠う「忠君愛国」の歌が、【初版本】の冒頭を飾っていたが、昭和 27 年刊の【改訂本】の見返しは、「忠君愛国」の 2 つの歌はカットされ、イラストのない無地の見返しに変わっていた。

そして、平成 20 年刊の【復刻本】の見返しは、月を仰ぐ鹿のイラストとなっている (右図)。





① 昭和 15 年初版

森岡美子著

410 頁、1 圓 90 銭

金蘭社 刊

【初版本】

② 昭和 27 年改訂版

森岡美子著

350 頁、320 円

富山房 刊

【改訂本】

③ 平成 20 年改定新版

森岡美子著

352 頁、1800 円

富山房インターナショナル刊

【復刻本】

改めて、3 冊の『万葉集物語』を見てみよう。書名の『万葉集』はいずれも「万」ではなく、旧字体の「萬」を使った、同じ『万葉集物語』。著者も同じ森岡美子。一番左の①初版の発行年は、昭和 15（1940）年、皇紀 2600 年の記念出版のためか、今はボロボロになっているが豪華な化粧箱入りである。本稿では、【初版本】と呼ぶ。次の本②が、太平洋戦争が終わって 7 年後の昭和 27（1952）年に刊行された改訂版。こちらも化粧箱入りで、【改訂本】と呼ぶ。そして、一番右の 3 冊目の本③が、【改訂本】が名著として評価が高いことから半世紀以上後の平成 20（2008）年に、その内容はほぼそのまま、装丁や挿絵を代えて発行された改訂新版である。いわゆる復刻版ではないが、3 冊の本の区別を分かりやすくするため、本稿では【復刻本】と呼ぶ。

ということで、この 3 冊の本は、表紙のデザインや装丁、挿絵は異なるが、同じ著者が、『万葉集物語』という書名にこだわり、初版が出版された後、それが改訂され、更に復刻された、基本的に同じ本なのである。著者の森岡美子氏は、【復刻本】のプロフィールによると、1913 年東京生まれ、日本女子大学文学部と東北帝国大学国史学科を卒業した弱冠 27 歳で、【初版本】を上梓している。戦後、東京大学国史学科大学院を修了し、学習院女子部（中等科、高等科）教諭の時、【改訂本】を刊行。その後学習院女子短期大学の教授となっている。【初版本】は金蘭社から刊行されたが、【改訂本】以降は出版社が変わって、富山房（ふざんぼう）から刊行されている。そして、【改訂本】から半世紀以上後、【復刻本】が富山房インターナショナルから刊行されたことを、当時 95 歳の著者は「あとがき」に「望外の喜び」と書いている。

上記の本の定価を見ると、【初版本】1 圓 90 銭、【改訂本】320 円、そして、【復刻本】1800 円と大幅に変わり、【復刻本】は【初版本】の約 1000 倍の値段になっている。

ところで、時代により本の値段が違うのは当然だが、それとは別に、この 3 冊の本には、同じ本でありながら大きく異なるところがある。それは何か？

上記の定価の左にある頁数を見てほしい。【初版本】が 410 頁、そして、【改訂本】350 頁、【復刻本】352 頁、となっている。【改訂本】と【復刻本】は、当然のことながらほぼ同じ頁数だが、【初版本】とその後の 2 冊とは、頁数が大幅に違っていた。【改訂本】は、【初版本】より、60 頁も減っていたのである。

それに気づいた時、「これは一体何なんだ」、と思った。改訂版なのに、なぜこれほどに頁数が減っているのか？ 国語辞典によると、改訂とは、「書物などの内容を、部分的に改め直す」とか、「書物などの文字、文章の誤りや不備を直すこと」とある。辞書の解釈をそのまま当てはめると、【初版本】には、60 ページ分の「誤りや不備」があったのでは、ということになる。つまり、その「書物の内容を、部分的に改め直し」ただけではなく、「文章の誤りや不備」を削除したからでは、と考えるのは、至極当たり前のことである。とすると、何をどう直したのか？ 何をどう削除したのか？ つまるところ、【初版本】から【改訂本】に改訂するにあたって、どのような意図のもとに改め直したのか、ということに尽きるが、それについては、「内容、章立てなどに訂正、修正を加えた」とだけしか書いてなく、改訂の方針は見えてこない。そこで、【初版本】と【改訂本】とを、丹念に読み比べていくしかない。できるだけ、【初版本】と【改訂本】の本文を引用しながら、【初版本】から【改訂本】へ改訂された時、いったい何ががあったのか、できるだけ具体的に、何を改め、何を削除したのか、順次読み解いていくことにする。（以下、< > 括弧内は、引用部分。【初版本】からの引用は赤字、【改訂本】からの引用は青字で表示する。冒頭に引用する歌も同様）

『萬葉集物語』の【初版本】の表紙の裏側、つまり見返しが軍歌「海行かば」だったが、【改訂本】ではそれがなくなっていたことは前述した。そして、それは見返しだけでなく、【初版本】の冒頭、「序」も同じ経緯をたどっていた。

【初版本】は、まず「父兄の方々へ」として、著者の「序」から始まる。記述は、旧字体で書かれている。

<日本の数多い古典の中、児童に最も讀ませねばならないもの、それは萬葉集であると思ひます。「大君の醜の御楯」となり、「海行かば水づく屍、山行かば草むす屍」とならむことを誓った、私たちの祖先の萬葉人の天子さまに對する赤心は、どんなに幼いものたちの心に深い感銘を興へることでせう。又どんなに強い國民意識を喚起させることでしよう>

いきなり冒頭から、「醜の御楯」と「海行かば」の 2 つが取り上げられている。「醜の御楯」については後述するが、「海行かば」は、【改訂本】から、すべて消されることになるのを、私たちはこれから見ていくことになる。

【改訂本】は、見出しが「自序」と少しだけ変わり、字体も、書名の「萬」だけを除き新字体になるが、「海行かば」がなくなっただけではなく、その語り口はもとより、内容がガラッと大きく変わることになる。

<お菓子のない国。それがどんなにつまらない、さみしいものであるかはみなさんもよくごぞんじでいらっやいましょう。お菓子はおいしいうえに栄養があって、私たちの生活を豊かに、そしてこのうえなくたのしいものにしてくれます。もしみなさまが学校で学んでいらっやる勉強を三度の食事にたとえるなら、お家でお読みになる本

は、ちょうどお菓子のようなものでなければなりません。私はたのしく読みながら自然に学べる本を書きたいと思っていました。いくらためになる本でもつまらなくてはなんにもなりませんし、また興味深く読んでも内容が貧弱であつたら、まったく意味のないことでしょう。私がささやかなこの本を書いたのは、この目的に少しでも近づきたいと思ったからです>

【初版本】では、「大君の醜の御楯」や「海行かば水づく屍」となり、「強い國民意識を喚起させること」と言っていたのに、【改訂本】になると、突然「お菓子のようにでなければならない」と、大きく変わっている。

この「序」、或いは「自序」を受けて、物語は、「一、はじめに（解題）」から、始まる。【初版本】は、いきなりこのように書き出している。

<皇紀二千六百年！……今年は、皆さまも御承知のやうに、神武天皇が、橿原宮に御即位あそばされてから、ちやうど二千六百年目にあたる、まことにおめでたい年です。二千六百年といへば、ずいぶん長い年月ですね>

<萬葉集の尊さは、その率直な雄大な歌風、純朴、眞實の心にあるとも申せませう。又、千年以上も前の、あらゆる階級の、あらゆる地方の日本人、即ち國民全部の歌集であるといふことも尊いことでせう。また、日本人の生活状態や感情などをうかがい知ることが出来るのも亦尊いことの一つでありませう。しかし、最も大切なことは、古代の人々が、皇室を敬い、天子さまの御為には、喜んで命を捨てたといふ、忠君愛国の精神が、萬葉集二十巻を貫いてゐることだと思ひます。かかる精神を「萬葉精神」と申してゐます>

【改訂本】では、ここもまたすべて削除されて、全面的に書き替えられる。<皇紀 2600 年！>と、「万葉精神」「日本精神」「天子様のために」と強く呼びかけたのに変わって、次のように、優しく語りかける。まるで違う本を読んでいるようである。

<私はみなさまに美しい贈り物をさしあげたいと思います。それはおいしいチョコレートやきれいなノートブックではなくて、興味をもって楽しくおよみになっているうちに、しだいに知識を豊かにする万葉集のお話です。

（略）日本人は、文化的な方面でもいろいろつばな仕事をしてきましたが、万葉集は日本人が残していった文化遺産の中でもひととき高く評価されねばならないものといつていいでしょう。

私は、そんなにつばな万葉集というものを、みなさまに知っていただきたいために、この本を書きましたが、最後までおよみになれば、自然にみなさまは、「なるほど、万葉集は日本の宝物のようなものだ」ということがわかりくださることと思います>

「そんなにつばな万葉集は、日本の宝物のようなものだ」というのは、確かにその通りだが、「天子さまの御為には、喜んで命を捨てたといふ、忠君愛国の精神が萬葉精神と申してゐます」と言い切っていたのが、嘘のようである。

そして、【初版本】の「はじめに」は前段に引き続いて、あたかもその駄目を押すかのように書いている。

<今度の支那事變で天子さまのために、そして日本のために、喜んで死んで行くあの兵隊さんたちの精神は、實に、むかしの萬葉集にあらはれ、連綿として今日までもつづいてゐるのです。それが、尊い日本精神なのです>

言うまでもなく、この部分は、【改訂本】からカットされているが、この「はじめに」の変容には驚くばかりである。

それら内容面とは別に、この「はじめに」の中でちょっと気になった点がある。万葉集の読み方と表記である。

【初版本】では、<萬葉集の讀方は、「マンエフシフ」と讀むのが正しいのです>と断定していることである。それが、【改訂本】では、<よみ方は、「マンヨウシュウ」とよむのが正しいといわれています>となっていて、今と同じ読み方になっている。万葉集の読み方は時代によって変わったのは確かで、高岡万葉歴史館坂本館長編の【万葉事始】によると、奈良から平安初期にかけては、「マニエフシフ」、「マンエフシフ」と読まれ、平安から鎌倉時代にかけては、「マンエウシフ」、室町時代以降になって、「マンヨウシュウ」、「マンニョウシュウ」と読まれるようになった、とされている。

そこで、改めて、坂本館長に、「万葉集の読み方と表示」について尋ねてみた。それによると、「万葉の当時も実際はマンヨウシュウと発音されていたという説もありますが、奈良時代は（ン）のような撥音（はつおん）や（シュ）のような拗音（ようおん）がまだ生まれてなかったので、当時はマニエフシフと発音していたと考えるのがいいかと思います。拗音は室町時代に日本語の音韻体系として確立しました。マンニョウシュウというのは、二つの音が連続するときの音変化、いわゆる連声作用を起こしたもので、下った時代の読み癖でしょう。ですから、やはり、マンヨウシュウが正しいと思います」

ということで、【初版本】の時代、つまり、昭和の初期も、一般的には、「マンヨウシュウ」と読みながら、奈良時代の読み方は、「マンエフシフ」だった、という意だろうと思われるが、2冊の『萬葉集物語』の「序」と「はじめに」を読み比べ、万葉集の読み方も変わった、となると、まるで違う本を読んでいるような気がする。そもそも、【改訂本】では、年号は西暦で表記されているが、【初版本】は、すべて皇紀の紀年法で表されている。

そして、説明するまでもないが、【初版本】のテーマであったはずの「萬葉精神」や「忠君愛国精神」は、ここだけではなく、【改訂本】全体から完全に抹消されていた。

「序」や「はじめに」で、明確にテーマを「忠君愛国精神」と打ち出しながら、それが、【改訂本】では、「美しい贈り物」、「立派な万葉集」に代わるとなると、それは、その通りなのだけれど、美辞麗句としか受け取れない表現に思ってしまうのは否めないところである。

「万葉集」そのものは、古来不変にもかかわらず、3冊の『萬葉集物語』は、物語冒頭の「序」と「はじめに」だけ見ても、同じ本でありながら、太平洋戦争をはさんで、その核の部分が大きく変わってしまったことを知るのである。それを、果たして時代のせいだけにしていいのだろうか。次回は、本文を読み比べる。

